長屋王宅宴詩再考—比較文学的立場から—

加藤有子

はじめに

かつて、稿者は二〇〇〇年以降『懐風藻』詩が『高氏三宴詩集』中の詩の影響を受けている事を指摘してきた。[1]『高氏三宴詩集』とは、唐の高宗の頃、高正臣の亭で催された三つの宴で作られた詩を輯めたものである。[2]

近年、この『高氏三宴詩集』が注目されてきている。例えば、二〇一三年に土佐朋子氏が、大津皇子詩を論ずる際に「確かに、『高氏三宴詩集』の用例が、これらの用例中の多くを占めることは注目される」などと触れられ、[3]二〇一七年に三木雅博氏は、『懐風藻』所収・百済公和麻呂の「初春於佐僕射長王宅讌」詩の「入山家」について、

この「山家に入る」という表現は初唐の有名な詩人陳子昂（六六一～七〇二）の「晦日宴高氏林亭」（『全唐詩』巻八十四）の冒頭の「尋春遊上路、追宴入山家。」を学んだものと思われる。語句の一致のみならず詩の題材が酷似しているからである。

などとする（後述する）。[4]この引用にある「晦日宴高氏林亭」は『高氏三宴詩集』に収録されいている。

また林宇氏が二〇一八年の上代文学会秋期大会で七五番詩との比較を発表されたのもそれである。[5]

『高氏三宴詩集』は『懐風藻』研究にとっては重要な研究対象であることは間違いないだろう。

ところで、土佐朋子氏はその後二〇一八年に、四庫全書本の『高氏三宴詩集』は後代の編になるという説をあげている。[6]稿者は現行本の『高氏三宴詩集』の形式は宋代頃のものだろうと考えていたが。[7]宋代以前にも当然その原型は存在してい

る。中国文献では原型が失われつつある中に、残闕を再編するのは通例である。

とはいえ、本稿では通行本の『高氏三宴詩集』という名前を避け、原型を意識して「高氏宴詩群」と呼ぶことにする。

かつて拙稿では、長屋王宅の宴詩との類似点をあげたが、端的な類似点を並べ上げるに留まってしまった。本稿では後続の論文や発表などを踏まえ、高氏の宴詩群と『懐風藻』所収の長屋王宅の宴詩との影響関係を再考する。

一、東晋の宴詩から初唐の宴詩

前掲の三木雅博氏『平安朝漢文学鉤沈』では、前掲引用部の後に、

貴人が山間の別邸に文人達を集めて、詩宴を催すことは中国東晋の王羲之の有名な「蘭亭」の宴に端を発し、陳子昂が招かれた高氏の林亭の宴にもその流れが受け継がれているが、こうした風流な行事が遣唐使達を介して日本にもたらされた結果、長屋王の宴なども行われたものであろう。

と続けている。[8] 三木氏は蘭亭の宴詩と「高氏宴詩群」を同じ流れの上に見ており、更に長屋王宅の宴詩もその影響下として捉えておられる。これに関しては、小島憲之氏が、

王勃や駱賓王などの初唐詩序は、全體としてこの王羲之の蘭亭記に負うた點がみられ、これが早くも初唐詩序の模範になったのではないかと思はれる。

など、蘭亭記から初唐詩序へを言及した上で万葉歌への影響を論じているのが近い。[9] 小島氏の指摘する「初唐の詩序」に、「高氏宴詩群」所収、陳子昂の「晦日置酒林亭」詩序も含まれ、また影響は万葉歌に限定されるものではない。文学の形態から『懐風藻』詩は尚更である。

もちろん、影響関係は三木氏の指摘するような風流の詩宴のあり方や詩そのものも、それに含まれよう。

それらは、四庫全書本『高氏三宴詩集』の「詩集詩後」や『唐詩紀事』高正臣の項目に「高正臣（中略）習右軍書法」とあることからもうかがえる。これらによると宴を開いた高正臣自身が「蘭亭記」を学んでいたと言える。「右軍の書」（王羲之の書）といえばまず「蘭亭序」だからである。おそらく高正臣は書法を含めた蘭亭の詩宴のあり方そのものも享受し、自邸での詩宴はその享受の成果であったろう。[10] そして、そこで作られた宴詩を集めたのが「高氏宴詩群」である。

おそらく日本に於いても「高氏宴詩群」は「蘭亭記」に準

じて、詩と書の手本として珍重されたことであろう。唐の太宗が「蘭亭序」の搨模本を大量に作らせた話は著名であり、[11]また光明皇后が王羲之の雙鉤填墨本「楽毅論」を臨書しているように、[12]唐の初頭頃の王羲之への注目度や日本への影響は絶大であった。王羲之を学んだとされる高正臣の「高氏宴詩群」にも類する関心があったのではないか。[13]

また、序文を書いた陳子昂は、後の李白や杜甫に影響を与えた詩人と評される、[14]初唐の白眉である。その陳子昂の序文から始まるこの詩群は、唐代においての評価も非常に高かったと考えられる。唐の文化を積極的に受容していた日本人にとって、非常に興味深い詩群であったと推測できる。

個々の詩内容に関して見ると「高氏宴詩群」は六朝の著名な宴詩、例えば晋の石崇の金谷苑の詩宴などをはじめとして様々な故事を踏まえている。しかし詩句の類似のみからすると「蘭亭記」と「高氏宴詩群」との類似点は単純に見えては来ない。

本稿では、このような「高氏宴詩群」の影響を受けたと考えられる『懐風藻』宴詩の、中でも臣下の邸宅での宴詩ということが最も明確にわかる、長屋王宅の宴詩に注目する。

ここでは通行本としてある四庫全書本を元に『全唐詩』で修正を加えた本文で内容の考察を行いたいと思う。

構成としては、四庫全書『高氏三宴詩集』によると、巻上に「晦日置酒林亭并序」・巻中に「晦日重宴」・巻下に「上元夜宴效小庾體并序」の三つの詩群と「高氏三宴詩集詩後」によってなっている。うち、本稿では「晦日置酒林亭并序」をA群、「晦日重宴」をB群として論じてゆく。A群序文は陳子昂で、詩の数は二十一首。B群序文は欠失していて、詩は九首である。

また、陳子昂の詩序に関しては、四庫全書所収の『高氏三宴詩集』では次に示した傍線部のみ所収で、内容的に欠落している。本稿では特別に詩序のみ『全唐詩』所収の本文を引用する（傍線は稿者）。

また、A群詩作者は①高正臣・②崔知賢・③韓仲宣・④周彦昭・⑤高球・⑥弓嗣初・⑦高瑾・⑧王茂時・⑨徐皓・⑩長孫正隱・⑪高紹・⑫郎餘令・⑬陳嘉言・⑭周彦暉・⑮高嶠・⑯劉友賢・⑰周思鈞・⑱陳子昂・⑲張錫・⑳王勔・㉑解琬・であり、B群詩作者は①高正臣・②韓仲宣・③弓嗣初・④高瑾・⑤陳嘉言・⑥周彦暉・⑦高嶠・⑧周思鈞・⑨陳子昂である。紙幅の都合上、並記できなかった。

A「晦日置酒林亭并序」

夫天下良辰美景、園林池觀、古來遊宴歡娛衆矣。然而地或幽偏、未睹皇居之盛。時終交喪、多阻升平之道。豈如光華啓旦、朝野資歡、有渤海之宗英。是平陽之貴戚、發揮形勝。出鳳臺而嘯侶、幽贊芳辰。指鷄川而留宴、列珍羞於綺席。珠翠瑯玕、奏絲管於芳園。秦箏趙瑟、冠纓濟

濟。多延戚里之賓、鸞鳳鏘鏘。自有文雄之客、總都畿而寫望。通漢苑之樓臺、控伊洛而斜□。臨神仙之浦溆、則有都人士女、俠客游童、出金市而連鑣、入銅而結駟。香車繡轂、羅綺生風。寶蓋蜩鞍、珠璣耀日。於時律窮太簇、氣淑中京。山河春而霽景華、城闕麗而年光滿。淹留自樂、玩花鳥以忘歸。歡賞不疲、對林泉而獨得。偉矣！信皇州之盛觀也、豈可使晉京才子、孤摽洛下之游。魏室群公、獨擅鄴中之會。盍各言志、以記芳遊。同探一字、以華為韻。

①正月符嘉節、三春玩物華。忘懷寄尊酒、陶性狎山家。
柳翠含煙葉、梅芳帶雪花。光陰不相借、遲遲落景斜。
②上月河陽地、芳辰景望華。綿蛮変時鳥、照耀起春霞。
柳揺風処色、梅散日前花。淹留洛城晩、歌吹石崇家。
③欲知行有樂、芳尊對物華。地接安仁縣、園是季倫家。
柳處雲疑葉、梅間雪似花。日落歸途遠、留興伴煙霞。
④勝地臨鶏浦、高會偶龍池。御柳驚春色、仙筇掩月華。
門邀千里馭、杯泛九光霞。日落山亭晩、雷送七香車。
⑤温洛年光早、皇州景望華。連鑣尋上路、乗興入山家。
輕苔網危石、春水架平沙。賞極林塘暮、處處起煙霞。
⑥上序春暉麗、中園物候華。高才盛文雅、逸興滿煙霞。
參差金谷樹、皎鏡碧塘沙。蕭散林亭晩、倒載欲還家。
⑦試入山亭望、言是石崇家。二月風光起、三春桃李華。
鶯吟上喬木、雁往息平沙。相看會取醉、寧知還路賒。
⑧踐勝尋良會、乗春玩物華。還随張放友、來向石崇家。
止水分巖鏡、閒庭枕浦沙。未極林泉賞、參差落照斜。
⑨綺筵乗暇景、瓊醑對年華。門多金埒騎、路引璧人車。
蘋早猶藏葉、梅殘正落花。藹藹林亭晩、餘興促流霞。
⑩晦晩屬煙霞、遨遊重歳華。歌鐘雖戚里、林藪是山家。
細雨猶開日、深池不漲沙。淹留迷處所、巖岫幾重花。
⑪嘯侶入山家、臨春玩物華。葛弦調緑水、桂醑酌丹霞。
岸柳開新葉、庭梅落早花。興洽林亭晩、方還倒載車。
⑫三春休晩節、九谷泛年華。半晴餘細雨、全晩澹殘霞。
尊開疏竹葉、管應落梅花。興闌相顧起、流水送香車。
⑬公子申敬愛、攜朋玩物華。人是平陽客、地即石崇家。
水文生舊浦、風色滿新花。日暮連歸騎、長川照晩霞。
⑭砌蓂收晩魄、津柳競年華。既狎忘筌友、方淹投轄車。
綺筵回舞雪、瓊醑泛流霞。雲低上天晩、絲雨帶風斜。
⑮飛觀寫春望、開宴坐汀沙。積溜含苔色、晴空蕩日華。
歌入平陽第、舞對石崇家。莫慮能騎馬、投轄自停車。
⑯春來日漸撿、琴酒逐年華。欲向文通逕、先遊武子家。
池碧新流滿、巖紅落照斜。興闌情未盡、歩歩惜風花。
⑰早春驚柳穟、初晩掩賒華。騎出平陽里、筵開衛尉家。
竹影含雲密、池紋帶雨斜。重惜林亭晩、上路滿煙霞。
⑱尋春遊上路、追宴入山家。主第簪纓滿、皇州景望華。
玉池初吐溜、珠樹始開花。歡娯方未極、林閣散餘霞。

⑲雪盡銅駝路、花照石崇家。年光開柳色、池影汎雲華。
賞洽情方遠、春歸景未賒。欲知多暇日、尊酒清澄霞。
⑳上序披林館、中京視物華。竹窗低露葉、梅逕起風花。
景落春臺霧、池侵舊渚沙。綺筵歌吹晚、暮雨泛香車。
㉑主第簪裾出、王畿春照華。山亭一以眺、城闕帶煙霞。
横堤列錦帳、傍浦駐香車。歡娛屬晦節、酩酊未還家。

B「晦日重宴」序云云缺凡八人同用池字為韻

①芳辰重游衍、乘景共追隨。班荊陪舊識、傾蓋得新知。
水葉分蓮沼、風花落柳枝。自符河朔趣、寧羨高陽池。
②鳳苑先吹晩、龍樓夕照披。陳遵已投轄、山公正坐池。
落日催金奏、飛霞送玉巵。此時陪綺席、不醉欲何為。
③年華藹芳隙、春溜滿新池。促賞依三友、延歡寄一巵。
鳥聲隨管變、花影逐風移。行樂方無極、淹留惜晩曦。
④忽聞鶯響谷、於此命相知。正開彭澤酒、來向高陽池。
柳葉風前弱、梅花影處危。賞洽林亭晩、落照下參差。
⑤高門引冠蓋、下客抱支離。綺席珍羞滿、文場翰藻摛。
莫華彫上月、柳色藹春池。日斜歸戚里、連騎勒金羈。
⑥春華歸柳樹、俯景落蓂枝。置驛銅街右、開筵玉浦陲。
林煙含障密、竹雨帶珠危。興闌巾倒戴、山公下習池。
⑦駕言尋鳳侶、乘歡俯雁池。班荊逢舊識、斟桂喜深知。
紫蘭方出徑、黄鶯未囀枝。別有陶春日、青天雲霧披。
⑧綺筵乘晩景、高宴下陽池。濯雨梅香散、含風柳色移。
輕塵依扇落、流水入弦危。勿顧林亭晩、方歡雲霧披。
⑨公子好追隨、愛客不知疲。象筵開玉饌、翠羽飾金巵。
此時高宴所、詎減習家池。循涯倦短翮、何處儷長離。

この「高氏宴詩群」が遣唐使達の耳目にも届き、遙か海を渡って来ることになったのは、おそらく大宝二年（七〇二）年の第七回遣唐使派遣ではないかと考える。[15] 唐では中宗の嗣聖十九年で、序文を書いた陳子昂の没年でもある。これらと『懐風藻』詩との比較は次節にて行う。

本節では書法の問題も含め、六朝の著名な「蘭亭記」から「高氏宴詩群」への流れを考えた。初唐の白眉、陳子昂の序文になる詩群としても、また王羲之を学んだ高正臣の邸宅での風流の宴詩群としても、初唐において「高氏宴詩群」は非常に評価が高かったと想定できる。

その影響が顕著に見られる例を次節から具体的に示す。そのために、本節では大幅に紙幅をさいて、「高氏宴詩群」のうち二つの宴詩群を示した。

二、初唐の宴詩から長屋王宅の宴詩へ（境部王詩）

「高氏宴詩群」の『懐風藻』への影響関係は広範囲にわたるが、そのうち本稿では長屋王宅の宴詩を中心に比較する。

長屋王宅に於ける詩宴は、国際的文化交流の社交場でもあったと、多くの論者が指摘している。[16] そのうち長屋王宅では新羅の客を招いたものが多く遺るが、「高氏宴詩群」A群序によると、高氏の詩宴でも渤海の客を招いている。そのような点も「高氏宴詩群」が日本人に関心をもたれた原因の一つであったろう。その点は次節で触れる。

本節では長屋王宅の宴詩の一首として、境部王詩をとりあげる。次にあげるのが境部王詩と「高氏宴詩群」の類似点である。

「宴長屋王宅」　境部王　（五〇）

新年寒気盡。上月淑光輕。送雪梅花笑。含霞竹葉清。
歌是飛塵曲。肱即激流聲。欲知今日賞。咸有不歸情。

序　淹留自樂、玩花鳥以忘歸。歡賞不疲、對林泉而獨得。

A①正月符嘉節、三春玩物華。（略）柳翠含煙葉、梅芳帶雪花。
②上月河陽地、芳辰景望華。綿蛮変時鳥、照耀起春霞。
⑫尊開疏竹葉、管應落梅花。興闌相顧起、流水送香車。
⑰竹影含雲密、池紋帶雨斜。重惜林亭晚、上路滿煙霞。
⑳竹窗低露葉、梅逕起風花。（略）綺筵歌吹晚、暮雨泛香車。

B⑧輕塵依扇落、流水入弦危。勿顧林亭晚、方歡雲霧披。

第一句「新年」はA群①に「正月」、第二句「上月」はA群②に「上月」とある。「新年」「上月」ともに六朝詩でも見られる。

「竹」と「梅」の対は『懐風藻』の中では境部王詩のみである（「竹」のみの用例は多い）。中国詩では「竹」「梅」の対は少なくないが、境部王詩に近似する例は「高氏宴詩群」が最たるものである。A群⑫に「尊開疏竹葉、管應落梅花」、⑳に「竹窗低露葉、梅逕起風花」とあるのがそれである。A群⑰「竹影含雲密（略）上路滿煙霞」は「竹」と「霞」が近い。

また、「竹」と「柳」を入れ替えて考えると、境部王「含霞竹葉清」に対しA群①「柳翠含煙葉」は「葉が煙霞を含む」という表現で一致しており、「送雪梅花笑」と「梅芳帶雪花」とは「雪と梅の花」「梅と雪の花」という対には言葉遊びのようにも感じられる。

また、「歌是飛塵曲。肱即激流聲」の対もB群⑧の「輕塵依扇落、流水入弦危」と近い。「飛塵」に関しては小島『大系』が石川石足の「春苑、應詔」詩（四〇）「歌聲落梁塵」の頭注の『文選』「嘯賦」の李善注「七略曰、漢興善歌者、魯人虞公発聲、動梁上塵」とある虞公の故事を表現している。

また「肱即激流声」「流水入弦危」は『列子』や『呂氏春秋』に見える「伯牙鼓琴（中略）鐘子期又曰、善哉乎鼓琴、

湯湯乎若流水」などとある伯牙の琴の故事のこと。

この対に関して、福田俊昭氏は『楽府詩集』所収、隋・李徳林の「相逢狭路間」も指摘している。[17] 稿者はB群⑧も李徳林の楽府を踏襲し、その踏襲の流れのなかに境部王や山田三方「秋日。於長王宅宴新羅客」詩があると考える。これらを一覧してみると、

李徳林　「流水琴前韻、飛塵歌後輕」
B群⑧　「輕塵依扇落、流水入弦危」
山田三方「牙水含調激。虞葵落扇飄」
境部王　「歌是飛塵曲。肱即激流聲」

となる。いずれも、虞公の故事と伯牙の故事とを対にしている。高氏詩B群⑧は明確に李徳林を踏襲しており、山田三方の「落扇」は高氏詩B群⑧の「扇落」を参考にしたと考える方がわかり易い。また、境部王の「激流」は山田三方の「調激」と同じ概念から作られた表現か。参考までに「蘭亭序」には「清流激湍瑛帶左右。引以爲流觴曲水列坐」とある。これも参考にしたか。

李徳林と高氏詩B⑧との対比でもわかるように、前代の詩を参考にし、それを自分の詩に取り込んでゆくという作詩方法は中国においても見られる従前のものであり、『懐風藻』作者達が新たに始めた作詩方法ではない。本稿では、山田三方と境部王が李徳林詩のみでなく、高氏詩B⑧も見ていたと考えている。

かつて拙稿では境部王詩の「咸有不歸情」に関しても触れたが、本稿では省略する。

以上、本節では境部王詩「宴長屋王宅」詩と「高氏宴詩群」の二宴詩との比較を行った。ここでは「竹」と「柳」の対・虞公と伯牙の対という方向から比較をしてみた。また、「不歸」「忘歸」についても触れた。

三、初唐の宴詩から長屋王宅の宴詩へ
（百濟公和麻呂と山田三方）

次に本節では百濟公和麻呂の「初春。於左僕射長王宅讌」（七五）と「高氏宴詩群」を比較する。この詩に関しては前節にあげた三木氏の論にもあり、また林氏の発表もある。林氏の発表の素晴らしい点は韻における類似点を詳細に示したことである。稿者も単語の端的な類似はすでに拙稿にて示したが、[18] 再掲して不足点を補う。

「初春。於左僕射長王宅讌」百濟公和麻呂（七五）
帝里浮春色。上林開景華。芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。
庭燠將滋草。林寒未笑花。鶉衣追野座。鶴蓋入山家。

芳舎塵思寂。拙場風響譁。琴樽興未已。誰載習池車。

A①忘懐寄尊酒、陶性狎山家。柳翠含煙葉、梅芳帯雪花。
③柳處雲疑葉、梅間雪似花。日落歸途遠、留興伴煙霞。
⑤温洛年光早、皇州景望華。連鑣尋上路、乗興入山家。
⑩晦晩屬煙霞、遨遊重歳華。歌鐘雖戚里、林藪是山家。
⑪嘯侶入山家、臨春玩物華。（略）岸柳開新葉、庭梅落早花。
⑱尋春遊上路、追宴入山家。主第簪纓滿、皇州景望華。

B⑥春華歸柳樹、俯景落蓂枝。（略）興闌巾倒戴、山公下習池。
⑨此時高宴所、詎減習家池。循涯倦短擕、何處儷長離。

同じく長屋王宅での宴であり、季節も「新年」と「初春」で近似する。

先の境部王の詩に関しては「竹」と「梅」の対であったが、ここでは「柳」と「梅」「雪」の対が見られる。「柳」と「梅」の対の用例は『懐風藻』中に、箭集宿禰蟲麻呂「於左僕射長王宅」に「柳條未吐緑、梅芯已芳裾」（八二）・大津連首の「春日、於左僕射長王宅宴」「庭梅已含笑。門柳未成眉」（八四）・鹽屋連古麻呂の「春日、於左僕射長王宅宴」に「柳條風未煖。梅花雪猶寒」（一〇六）などある。いずれも長屋王宅での宴詩である。これら『懐風藻』や『万葉集』の「梅柳」に関しては、松田聡氏の万葉の梅柳の論にも詳しい。[19]

高氏宴詩でもA群①「柳翠含煙葉、梅芳帯雪花」・同③「柳處雲疑葉、梅間雪似花」（「雪」を含まない例として同⑪「岸柳開新葉、庭梅落早花」・B群④「柳葉風前弱、梅花影處危」・B群⑧「灌雨梅香散、含風柳色移」）などと多い。ここで注目したいのは、長屋王宅と同様に高氏宴詩でも同じ宴の詩に「竹」と「梅」、「柳」と「梅」の対の双方を詠み込んでいるということである。

というのも、唐詩以前の中国詩に「竹」と「梅」の対は多いが、「柳」と「梅」の対は多くないからである。福田俊昭氏はこの対に関して『初学記』所収の隋・劉端の「和初春宴東堂應令詩」「庭梅飄早素、簷柳變初黄」を指摘する。[20] また、『全唐詩』では、高氏宴詩の他に対で「柳」と「梅」が用いられる例はない。更に「梅」と「雪」とを「柳」と対比する例も他にない。唐の同時代の詩として長屋王宅の宴詩と高氏宅の宴詩はともに特例であるとも言えるのである。

仮に長屋王宅と高氏宅の双方とも実景を詠んだと考える場合、「竹」「柳」「梅」が植えられた、類似した庭園がそこに作られていたと考えることもできる。また、それを切り取り詩として表現していく目も類似していたことも。しかし、仮に高氏宴詩を共に詩作の手本として念頭にあった者が作った詩と考えてみよう。実景もさることながら「こう表現するべき」景と表現があって、その上で生まれてくる詩として考え

得るのである。

「入山家」は「高氏宴詩群」にA①「陶性狎山家」・⑤「乗興入山家」・⑩「林藪是山家」・⑪「嘯侶入山家」・⑱「追宴入山家」とある。前掲三木氏論文や林氏発表にもあるように、百濟公和麻呂の「入山家」はこれらによるものである。つまり、長屋王宅の「山家」は、『懐風藻』諸注のとる「山荘」「別荘」の意味のみでなく、「山公」の邸宅をも意味していると言えよう。

百濟公和麻呂「習池車」も「高氏宴詩群」B群⑥「下習池」B群⑨「習家池」とある。これらも「山家」と同様、山公の故事による。山公の故事とは拙稿[21]でも論じた。晋の山李倫の故事。『芸文類聚』他に所収されている。

次に同じ百濟公和麻呂の「秋日。於長王宅宴新羅客（賦得時字）」（七七）と「高氏宴詩群」の類似点をあげる。

「秋日。於長王宅宴新羅客」百濟公和麻呂（七七）
勝地山園宅。秋天風月時。置酒開桂賞。倒屣逐蘭期。
人是鶏林客。曲即鳳楼詞。青海千里外。白雲一相思。

詩序「指鶏川而留宴」

A④「勝地臨鶏浦、高會偶龍池。（略）門邀千里馭、杯泛九光霞」

⑥「參差金谷樹、皎鏡碧塘沙。蕭散林亭晩、倒載欲還家」

⑪「葛弦調緑水、桂醑酌丹霞。（略）興洽林亭晩、方還倒載車。」

⑬「公子申敬愛、攜朋玩物華。人是平陽客、地即石崇家」

B②「鳳苑先吹晩、龍樓夕照披。陳遵已投轄、山公正坐池」

⑥「林煙含障密、竹雨帶珠危。興闌巾倒戴、山公下習池」

⑦「班荊逢舊識、斟桂喜深知。紫蘭方出徑、黄鶯未囀枝」

百濟公和麻呂詩の「勝地」「鶏林」「千里」という表現はA群④の「勝地」「鶏浦」「千里」という表現に重なる。詩序には「鶏川」ともある。百濟和麻呂詩は「新羅」、「高氏宴詩群」は「渤海」という国外の客人が同席の宴という共通点がある。

「鶏林」は小島大系の補注が後代の『三国遺事』「乃改国号鶏林、後世遂定新羅之号」を引く、新羅のこと。「鶏」のみでも指すこともある。また『慧琳音義』では「唐言貴卽高麗国也。共事雞神曾載鷄翎故云翎貴也」とある。

「高氏宴詩群」では「有渤海之宗英」とあるが、渤海の首領大祚栄は高句麗人と言われている。[22]「高氏宴詩群」にみえる「鶏浦」「鶏川」などという表現もそこから来ているのだろう。

また、百濟公和麻呂詩の第五・六句目の「人是〜客。即〜」の対のあり方は、A群⑬の「人是平陽客、地即石崇家」に近い。また、「倒屣」は「履き物をさかさにする」で『魏志』などにもある語だが、A⑥「倒載欲還家」・⑪「方還倒載車」・B

⑥「興闌巾倒戴」などの山公の故事から導かれて選び取られた語のように稿者は見える。

その他、百濟公和麻呂詩の八句目「白雲一相思」は、従来王勃「有所思」の「相思明月夜、迢遞白雲天」の影響が強いと指摘される。参考までに高氏宴詩にも「相〜」の表現が多い。A群①「不相借（惜）」・同⑦「相看」・同⑫「相顧」・B群④の「相知」などあり、初唐によく用いられる表現であったか。

また百濟公和麻呂の「鳳楼詞」の「鳳」は林『新註』の「天子、皇族のことをいふに使ふから」という考え方もあるが、「高氏宴詩」詩序に「鳳臺」・B②に「鳳苑」「龍樓」の対があり、唐詩では臣下の庭園でも「鳳」用いていることがわかる。

最後に補足として、山田三方の「秋日。於長王宅宴新羅客」の詩序の前半部と「高氏宴詩群」の一部をあげる。

「秋日。於長王宅宴新羅客」山田三方（五二）

君王以敬愛之沖衿。広闢琴樽之賞。使人承厚之栄命。欣載鳳鸞之儀。於是琳瑯満目。蘿薜充筵。玉俎雕華。列星光於煙幕。珍羞錯味。分綺色於霞帷。羽爵騰飛。混賓主於浮蟻。清談振発。忘貴賤於窓鶏。（以下略）

A群高氏宴詩序

（前略）指鶏川而留宴、列珍羞於綺席。珠翠瑯玕、奏絲管於芳園。秦箏趙瑟、冠纓濟濟。多延戚里之賓、鸞鳳鏘鏘。（以下略）

B⑤高門引冠蓋、下客抱支離。綺席珍羞満、文場翰藻摛。

山田三方の「珍羞錯味。分綺色於霞帷」に対しては右の詩序に「列珍羞於綺席」とあり、またB群⑤に「綺席珍羞満」とある。「珍羞」はすばらしいごちそうのこと。『文選』「南都賦」の注に「爾雅曰珍。美也。方言曰。羞。熟。以羞之美」とある。六朝期には何例か用例がある。唐代に入ってからは高宗皇帝の「太子納妃太平公主出降」詩に「環階鳳樂陳、玳席珍羞薦」とあるが、同時期には用例は少なく、以後では李白や杜甫などが用いている。

また、山田三方詩序「欣載鳳鸞之儀」に対しては、高氏宴詩序に「鸞鳳鏘鏘」とある。

以上、本節では百濟和麻呂詩と山田三方詩序を「高氏宴詩群」と比較した。前節の境部王詩も含めて、『懐風藻』詩長屋王宴詩の中で最も「高氏宴詩群」の影響が明白な例として見てきた。その他にごく部分的に類似点が見られる例は長屋王宅の宴詩にいくつかあるが、論旨の都合上省略した。拙稿を参考にされたい。[23]

第二節とこの第三節で述べてきたように、「高氏宴詩群」と長屋王宅の宴詩とは確実に影響関係が見えることが再確認された。

おわりに

第一節では、書法の問題も含め、六朝の著名な「蘭亭記」から「高氏宴詩群」への流れを見た。「高氏宴詩群」は初唐の白眉、陳子昂の序文になる詩群をもつ詩集としても、また王羲之を学んだ高正臣の邸宅での風流の宴詩群としても、当時非常に評価が高かったと想定できる。おそらく唐に在留中の遣唐使達の耳目にも届き、遙か海を渡って来ることになったのだろう。そしてそれが、当時の日本人達の詩と書の手本として重用された。

第二節と第三節ではその影響を裏付ける例として、境部王詩・百濟和麻呂詩・山田三方詩序を「高氏宴詩群」と比較した。この三人の詩には明確な影響関係を再確認できた。

前稿・葛野王詩の論[24]では吉野詩と上官昭容詩との比較を行った。その際、吉野詩十二首のうち四首に明確な影響関係が指摘できた。本稿でも、長屋王宴詩と「高氏宴詩群」との比較で四首の影響関係を明確に指摘してきた。このような類似の傾向をどう見るべきか。本稿は類似の大枠を示すにとどまってしまったが、今後は更にその方面に課題を残すことになった。

※本稿では『懐風藻』は古典文学大系の本文を用いた。詩題は一部省略してあげている。『唐詩記事』『高氏三宴詩集』『陳拾遺集』は上海古籍出版社、『文選』『全唐詩』は中華書局、『藝文類聚』は中文出版、『三国遺事』は名著出版、『慧琳音義』は『大正新脩大蔵経』の本文を用いた。

※注釈は釈清譚『懐風藻新釈』（丙午出版社）・林古渓『懐風藻新註』（パルトス社）・世良亮一『懐風藻詳釈』（教育出版社）・澤田總清『懐風藻註釈』（大岡山書店）・杉本行夫『懐風藻』（弘文堂）・大野保『懐風藻の研究』（三省堂）・小島憲之『懐風藻（下略）』（岩波書店）・江口孝夫『懐風藻』（講談社）・辰巳正明『懐風藻全注釈』（笠間書院）・土佐朋子『懐風藻箋註 本文と研究』（汲古出版）を参考にしたが、各々に注は施さなかった。

※本稿では台湾の「新漢籍全文資料庫」と「寒泉古典文獻全文検索資料庫」の検索結果を参考にした。また「古籍全文検索資料叢書」の『先秦漢魏晉南北朝詩』『全上古三代秦漢三國朝文』『全唐詩』『全唐文』の検索結果も参考にした。

〈注〉

（1）「中国詩の受容―『懐風藻』詩人達の方法―」『懐風藻研究』第六号（二〇〇〇年）・「大津皇子『春苑宴』詩考」『日本文学研究』第四〇号（二〇〇一年）・「『懐風藻』詩所引の故事と風景―大津皇子詩と中国文学との比較から―」『日本文学研究』第五七号（二〇一八年）など

（2）四庫全書には多くの個人集が収録されている。それら多くは作者本人を編纂者としている。日本文学における私家集と撰者の問題に近似するが、その点に関しては論旨に逸れるので省略する。ここでは伝高正臣輯といった意味合いで考えるべきだろう。

(3) 土佐朋子「大津皇子『春宴言苑』詩の論—大津皇子が目指した『言宴』—」『古代研究』第四六号（二〇一三年）
(4) 三木雅博『平安朝漢文学鉤沈』（和泉書店）（二〇一七年）
(5) 林宇「『懐風藻』詩における『高氏三宴詩集』の受容—七五番詩の分析を手掛かりに—」平成三十年上代文学会秋期大会発表（二〇一八年）
(6) 土佐朋子「四庫全書所収『高氏三宴詩集』の資料的性格」『中国文学研究』第四四号（二〇一八年）「偽託の書」と言うのにはあまりに資料不足であるし、中国文献を知らなすぎる。『唐詩記事』の内容は元来、資料の一部分のみを引用する文献である。また、『日本國見在書目録』は成立が寛平年間（八八九～八九八年）とされ、焼失を逃れた運良い文献の目録でしかなく、通常は参考資料としてしか扱われていない。いずれも根拠とはなりえない。
(7) 四庫全書本『高氏三宴詩集』は序などを始めとして脱落が多い。『古今歳時雑詠』を元に本文を作ったと考えた場合、日中の本文校訂の傾向としてはむしろ欠如した点を補うか注記する方向性がある。また本文解釈学的に見ても何らかの補遺があるべきである。内容的に大きく欠如したままの本文が校訂本文とも思えない。この場合、『古今歳時雑詠』所収の本文とは別系統の本文が元来あったと考えるのが妥当だろう。本文の誤脱については、『四庫提要』が「後好事者傳抄成帙、乃列諸典籍之中耳、惟輾轉録、不免多訛」としている。
(8) 前掲（4）に同じ
(9) 小島憲之「天平期に於ける萬葉集の詩文」『上代日本文學と中國文学』（塙書房）（一九六四年）
(10) 辰巳正明『「令和」から読む万葉集』（新典社）（二〇一九年）では『万葉集』の「梅花歌三十二首」の序と「蘭亭序」との丁寧な比較をおこなっている。「蘭亭序」の解説も詳しい。「蘭亭序」は唐初頭頃の宴詩の見本のような存在であったことがわかりやすい。これらの梅花と「高氏宴詩群」との関係も今後研究を広めたい。
(11) 桃山艸介「〈蘭亭帖跋〉訳注」『趙子昂　漢汲黯伝・天冠山詩・蘭亭帖跋』（マール社）（一九八九年）他、多数の文献に見る。
(12) 田淵保夫「光明皇后楽毅論と王羲之の書」『立正大学人文科学研究所年報』第二九号（一九九一年）
(13) 『四庫提要』でも「如蘭亭詩之墨迹流伝」とある。しかし正確には日本に伝来した詩群は高正臣自身が揮毫したものの謄模本であったはずである。ここでは、詩学と書学など文化の流れとして考えている。また「蘭亭記」から「高氏宴詩群」への内容上の比較も詳説しなければならないが、別稿にて論ずる。
(14) 鈴木修次「陳子昂論」『唐代詩人論（一）』（講談社）（一九六五年稿・一九六七年補筆）『全唐詩』と『陳拾遺集』に収められる詩の数は『陳拾遺集』の方が少ない。また「高氏宴詩群」に見られる詩や序は四庫全書本の『陳拾遺集』には見いだせない。それらは日本文学での私撰集と私家集の間の問題や諸本・伝本の問題を想起させるが、別稿にて論じたい。
(15) 福田俊昭氏他は『翰林学士集』の将来もこの頃としている。稿者は『翰林学士集』などと類似した伝来であったのではないかと考えている。『『翰林学士集』注釈』（大東文化大学東洋研究所）（二〇〇六年）
(16) 小島憲之『上代日本文学と中国文学』下（塙書房）（一九

六五年）・波戸岡旭「八世紀一日本人の国際感覚―『懐風藻』の世界から―」『國學院雑誌』第一〇三巻第一一号（二〇〇二年）に長屋王宅の国際性についての論をあげる。また、遠藤光正「長屋王の詩歌とその創作時期について」『東洋研究』第九五号（一九九〇年）などにも詳しい

(17) 福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩（下）」『東洋研究』第一六〇号（二〇〇六年）

(18) （注1）のうち「中国詩の受容―『懐風藻』詩人達の方法―」に同じ

(19) 松田聡「万葉集の梅柳―『太宰の時の梅花に追和する新しき歌』の解釈をめぐって―」『上代文学』第九九号（二〇〇七年）、頼國文「殿前の梅、窓辺の梅」『古代文学の時空』（翰林書房）（二〇一三年）などにも詳しい

(20) 前出（17）に同じ

(21) （注1）うち『懐風藻』詩所引の故事と風景―大津皇子詩と中国文学の比較から」に同じ

(22) 孟慶遠編『中国歴史文化辞典』（新潮社）別に唐にできた地名「鶏川」もあるが、時期と地域が全く異なる。

(23) 注（18）に同じ

(24) 拙稿「葛野王「遊龍門山」詩考―比較文学的立場から―」『日本文学研究』第五九号（二〇二〇年）